

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成21年10月18日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 一貫制博士課程5年

氏 名 原 子 壮 太

事 業 区 分	平成20年度・長期派遣助成		
研 究 課 題 名	タンザニア南部の山麓高原地帯における社会動態とイネの品種多様性		
受 入 機 関	タンザニア連合共和国・ソコイネ農業大学		
渡 航 期 間	平成20年9月19日 ~ 平成21年9月18日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要 / 報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	2,600,000円	
	使用した助成金額	2,600,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	渡航費 300,000円	
		滞在費 2,300,000円	

はじめに

在来作物は栽培地域内でどのように保全されているのか、在来作物の多様性はどのようにして成立しているのか。これらの問いに対して、これまで各地で農民個人の品種との関わりや作物の生理的形質の違いに注目した議論がなされてきた。しかし、たとえば種が農民間で交換されることによって、域内外を流通しながら継承される場合もあり、対象地域の社会的環境、またその変容と保全との関わりについても検討される必要がある。報告者は、自給的稲作を生業とする地域において、「イネの品種が維持される社会的システムはいかなるものか」という問いを、フィールドデータから実証的に検討することを目的とした。

調査は、タンザニア南部のルブマ州イフィンガ村に、2008年10月から2009年9月までおよそ11ヵ月にわたり滞在し、主として農作業への参与観察と農民への聞き取り調査を実施した。同村は、幹線道路からおよそ50kmも離れた山間に位置し、交通の便は悪く、市場へのアクセスは基本的に徒歩による。標高600~900mの丘陵地は小さな起伏に富み、そこを居住域とするベナ・マンガは、2年サイクルで耕地を移動する焼畑と川辺湿地の水田でイネを栽培し、それを生計の基盤としてきた。

得られた知見

(1) 調査地域における人とイネとの重層的な関係

悉皆調査の結果から、調査村の各世帯は、毎年イネを4品種ほど栽培しているが、その品種構成は世帯によって変異が大きく、小さな村にもかかわらず、全体で45以上ものイネの栽培品種が存在していることが分かった。また、各世帯の品種選択には、生育の早晚、生産性(収量性)、耐乾性といった作物生理学的な形質のほかに、経済性や食味といった品種特性が複雑に組み合わせられていた。また今回の調査では、10種類のコメ品種について食味官能試験を実施した。被験者にコメの食味に関して自由に回答してもらったところ、興味深いことに被験者ごとに食味に対する好みが分かれた。品種ごとに異なる炊飯特性や農民が好む食味が一樣ではないことは、調査地域に多様なイネ品種が存在することの一因と考えられる。

(2) イネ品種の域内保全に果たす社会の役割

先に挙げた45種を越えるイネの栽培品種のうち少なくとも29品種が、およそ40年以上ものあいだ調査地域で栽培され続けている。一般にイネの種子は一年以上経ると発芽率が下がるとされているが、調査地域でも一昨年以上前に収穫された籾は種として用いない。つまり、イネの栽培品種は毎年栽培され続けることによって維持されるのである。ところが一方で、多くの農民は毎年、栽培品種をさまざまな理由から変更する。この一見矛盾する二つの事実に注目して、観察と聞き取り調査を実施したとこ

る、農民のあいだでおこなわれる品種の交換という行為が重要な役割を持っていることが示唆された。調査地域の農民は、新たに品種を入手する際、栽培品種を変更する際に他世帯と等量の交換を頻繁におこなう。この交換は長年にわたって繰り返されてきたものだが、この交換によって品種は地域内を流通している。調査地域にみられた多様な品種は、域内を流通しながら継承されているのである。

また、この地域では播種から収穫まで、ほぼすべての農作業に協同労働が投入される。協同労働の場は、各世帯の栽培品種の特性についてさまざまな情報が交換される場としても機能しており、各世帯の翌年の作付け品種を決定に少なからぬ影響を与えている。つまり、各世帯が有する品種群は協同労働を通して小集落内で認知され、またこうした小集団が焼畑耕地の移転を機に解散と再編を繰り返すことで、地域内における品種の循環が促されている。それぞれの品種がもつ機能的な特性と、社会的、文化的な慣習が重層的に連関することで、品種の多様性が継承されてきたのである。

今後、収集したデータの分析を進めるなかで、品種にまつわる農民個人の営為だけではなく、世帯間でおこなわれる品種交換、協同労働による情報の伝達という社会的行為から域内保全を考えていきたい。

謝辞

およそ一年にわたる長期のフィールドワークが実施できたおかげで、調査地域の農業を詳細に調査することができた。また、仮説形成とその検証、仮説の修正といった一連のプロセスをフィールドで一貫して実施することができた。機会を与えて下さった財団法人京都大学研究振興財団に深く感謝を申し上げます。